獨協医科大学公衆衛生学講座
疫学班研究室配属

Bird G News

Vol. 11 2025年2月3日
発行人：阿部

SDHと社会的処方の実践を学ぶ
ープライマリ・ケア学会ワークショップの報告ー

研究室配属５年生メンバーの今泉君が企画・運営に関わった、SDHについて考える学生セッションが、12月1日ライトキューブ宇都宮で開催された日本プライマリ・ケア学会関東甲信越ブロック地方会にて実現しました！！今泉君に、この企画立ち上げの経緯や込めた思いを聞きました。

2024年12月、プライマリ・ケア学会関東甲信越会で開催された学生セッションにおいて、「健康の社会的決定要因（SDH）」と「社会的処方」をテーマにしたワークショップを実施しました。本稿では、ワークショップの開催に至る経緯と内容について述べていきます。

開催の経緯と準備

私がSDHに関心を持つようになったきっかけは、2023年に参加した社会医学サマーセミナー(注：本ニュースレターBird G News vol.3にて紹介)での経験です。セミナーで、患者の生活状況や社会的背景を可視化する「ソーシャルバイタルサイン」を活用したワークショップを体験しました。このワークショップを通じて、単なる病気の治療だけでなく、患者の背景や環境を理解することの重要性を実感しました。

今泉君登壇の様子

取り上げられた症例では、生活習慣が乱れ、通院や服薬が難しい患者が描かれ、その背景に何があるのかを深く考えさせられました。この経験から、医師として患者の背景を理解し、SDHの視点を取り入れた医療を行う必要があると強く感じました。その気づきを他の医学生にも伝えたいという思いから、公衆衛生学講座の社会的処方勉強会で同様のワークショップを実施しました。その後、この取り組みを発展させ、12月のプライマリ・ケア学会の学生セッションで発表することとなり、本学の学生と自治医科大学の学生と協力し、月に1～2回のミーティングを重ね、準備を行いました。私はセッションの冒頭で、SDHやソーシャルバイタルサインの基礎について説明し、症例提示や進行、アンケート作成などは他の学生が務めました。

ワークショップの内容

ワークショップでは、参加者に「ソーシャルバイタルサイン」を使って症例患者の背景を考慮しながら医療プランを立案する議論を行いました。取り上げた症例は、糖尿病を患いながら、息子と二人三脚で生きる患者のケースでした。また、医学的ケアが必要でありながら、通院を断念している患者でした。参加者たちは患者に対し、多職種との連携方法やソーシャルワーカーへの橋渡し、家庭訪問の可能性を検討しました。議論の中で、どのようにして患者が抱える社会的要因に寄り添い、支援できるかに焦点が当たり、

ディスカッションの様子

他にも具体的で独創的なアイディアが幾つも出されました。セッションには50人以上の参加があり、「SDHの考え方を初めて知り、どのように実践していくかを学べて良かった」「病気を診るのではなく、患者そのものを見る視点が得られた」「初期研修に入ってからも実践できるようにしたい」といった感想があり、セッションを通じて参加者がSDHや社会的処方ついて学びを得ることができたと伺えました。

←ソーシャルバイタルサインを用いたディスカッションの内容

最後に

このセッションを通じて、参加者はSDHの視点を持つことや社会的処方の実践が何故必要なのかを理解し、実際の医療現場でどのように活用するかを考える貴重な機会となり、私自身もその重要性を改めて実感することができました。今後も「患者にとっての真の医療とは何か」を反芻しながら、SDHの視点を持ちながら社会的処方を実践し、患者が抱える社会的要因に対応した医療を提供していくために、学びを続けていきたいと思います。

今泉君、ありがとうございます。サマーセミナーでの学びを、研究室配属の勉強会や、このような学会での企画へと自主的につなげることができたのは、学びの還元の形として大変素晴らしいと思います。このワークショップには、社会的処方勉強会メンバーの石井さん、島田さん、野々山君も参加しましたので、みなさんの感想も聞いてみましょう。

石井　舞佳　プライマリケア学会でSDHについてのセッションに参加させていただきました。私が所属したグループには、医学生だけでなく医師や看護師など様々な職種の方が参加していました。実際の現場ではどのような対応をするのか、課題となる部分が何か、について話を伺うことができました。また、学生は現場に属していないからこその発想を出すなど、優劣なくさまざまな意見が出ることがこのセッションの良い部分であると感じました。

　このセッションを通じて、SDHとは、概念を理解をすることができれば社会に属する誰もがアイデアを出すことができるのだと改めて感じました。今回の学会での学びを生かし、今後も学内での活動を行いたいです。

勉強会メンバーと

島田　優果　学会に初めて参加しました。学生セッションでは、さまざまな職種の方とお話しすることができ、着目する観点が自分とは異なる部分が多くあり、とても勉強になりました。普段お話しする機会も少ないため、貴重な体験となりました。今泉先輩が前に出て進行している姿は、同じ研究室の仲間として誇らしく、学生でも学会で活躍することができるのだと教えていただきました。今参加しているSDHの勉強会でも、学会で発表できればと思います。

野々山　陽仁　昨年の12月1日に実施された、プライマリケア連合学会の関東ブロック地方会に参加したので報告させていただきます。学会に現地参加するのは恥ずかしながら今回が初めてだったのですが、現地で感じた事は参加している先生方、学生の多さとその多さからくる熱気でした。コロナ禍の期間中、オンライン形式の学会に参加した事があり、多くの学びを得る事が出来ましたが、このような熱気は現地の学会でなければ感じる事ができないものだと改めて実感しました。医師は生涯学び続けなければならない事を様々な方面から言われますが、この熱気が今回参加した先生方、学生の学習意欲の高さからくるものではないかと思い、自分も意欲を高く持たなければならないと思いました。

みなさんそれぞれに多くのことを感じてもらえたようで私もうれしいです。今後も社会的処方勉強会では、このような活動を通してSDHについて考えていく予定です。

忘年会開催

12月10日講座忘年会を行いました。527室を会場に、春山先生の手料理が振舞われ、にぎやかな会となりました。春山先生、ごちそうさまでした！！

忘年会の様子

編集後記：お正月気分も終わり、あっという間に現実に戻されてしまいましたが、みなさん体調に気を付けてそれぞれ頑張っていきましょう。